

音楽と私

習志野シニアアンサンブル 小山格一

1、首振り3年？

「尺八って音出すの難しいんでしょう？。首振り3年とか？」。よく言われます。実は、正しく教われれば10分も経たず音が出ます。そして、音が出れば首振りもすぐ出来ます。3か月もすれば自然に首を振ってます。首振りにはビブラートを掛けるための奏法です。首振りは大事です。首振りしてビブラートを掛ける事により「音が歌に変わる」と言います。

バイオリンでも弦を押さえた指を前後に動かしビブラートを掛けますが、同じ事です。ビブラートしないバイオリン曲は多分存在しませんよね。

どの楽器もあるレベルの演奏をするのは難しいですが、尺八だけ特別に難しいと言う事はないと思います。尺八人口が少ないのは、「虚無僧が吹く道具」「民謡の伴奏楽器」のイメージが強かったからかもしれませんね。

2、尺八との出会い

50年近く前になりますが、大学に入り新入生歓迎のデモ演奏している和楽器のサークルが気になり、サークル室を覗いたのが尺八との最初の出会いです。簡単そうに演奏する先輩から勧められ尺八を吹いてみたものの音が出ず、なにくそとサークル室に通う様になりました。（琴や三味線を弾く可愛い女性が居たのも理由だったかもしれませんが）授業そっちのけで練習してたので、半年もしたら普通の曲（六段の調べとか千鳥の曲とか）は吹ける様になってました。

そして大学後半に、「山本邦山と沢井忠夫のバッハの曲」や「村岡実のジャズやポップス」に魅せられていきました。尺八譜は通常独特のカタカナで記述されてますが、五線譜で演奏が出来る様になったのもこの頃です。

3、尺八の構造

尺八は「真竹」と言う種類の竹で出来ています。竹筒の中は精密に加工され、音を安定させる為に「漆」が塗られています。古い時代の尺八は音程がまちまちで合奏には適さない物も多かったのですが、現在は、音程も正確になって洋楽器との合奏もしやすくなっています。

また尺八ほど構造が単純な楽器は無く、指穴は、表に4個、裏に1個の5個だけです。指穴を順番に開けるといわゆるヨナ抜き五音音階です。五音音階の曲、例えば「昴」や「北国の春」等は、運指だけ見れば容易な曲です。

指穴を徐々に開けるポルタメント奏法、息の加減でムラ息・カザ息、首の振り方息の出し方で色んなビブラート等尺八ならではのテクニックが可能です。

この単純な構造の音色と色んな奏法のお陰で「曲に味を付けやすい」のだと思います。

4、洋楽器と合奏する時の尺八

前述の様に、5個しか指穴が無いのに、12音階の洋楽器とどうやって合奏するか？それは、指穴を半分閉じたり、僅かに閉じたりします。当然早いパッセージは不得意です。

私の場合は、補助の指穴が2個付いた7孔尺八を使っています。がこれでも♭や♯が多い曲は演奏困難になります。

しかし尺八は長さの異なる管（「C管」「C#管」「D管」・・・半音毎にあります）を使う事により容易に演奏する事もできます。

例えば途中で1音転調の時、同じ運指で、C管>D管と持ち変えるだけで可能になります。ちょうどクラリネットの「B♭管」と「A管」の使い分けみたいな感じでしょう。



(写真1：下の長い方が1尺8寸=C管。上の短い方が1尺6寸=D管)

5、習志野シニアアンサンブルとの出会い

大学卒業後は仕事も忙しく「時々一人で遊び吹き」程度でしたが、還暦が間近になり今後の楽しみは「音楽」と思い始めました。出来れば「尺八で合奏させてくれるアンサンブルが無いか」と探してた時に見つけたのが、習志野シニアアンサンブルでした。



アンサンブルの曲で「尺八」のパート譜がついているのはほぼ皆無です。入団当初は、フルート譜を頂いて演奏してましたが、幸いな事に指導頂いている先生が尺八に興味を持って頂き、いろんな曲に尺八パートを入れて編曲して下さいました。時々アンサンブルをバックにソロ演奏もさせて頂き、団のメンバーや指導の先生に感謝しています。

(写真2：地元公民館文化祭での「古城」演奏)